

次の文章を読んで後の問いにこたえなさい。

一九八九年の「東欧革命」とソ連崩壊の後、私たちがこれまで慣れ親しんでいた世界地図は、ある意味ですっかり使い物にならなくなってしまった。むろん、陸地や河川、海洋等の自然誌的な地の分布や形状を示す地形図としては、一九八九年以前の地図も依然として使用可能ではある。だが、東西ドイツの統合、東欧諸国の国名変更や分裂、旧ソ連領内の共和国の独立や国名変更、そしてソ連邦そのものの消滅によって、ユーラシア大陸の大きな部分の国家的な版図ほんとは変わってしまった。

もちろん、これまで使ってきた地図が時代遅れになってしまったこと自体は、ソ連・東欧体制の崩壊という「現実」の反映である。オリジナルのソビエト連邦とその体制が崩壊し、それによってそれまでの地図が使い物にならなくなり、やがてその新しい模像として新しい地図が作られる。ここではたしかに、「オリジナル」としての世界は「コピー」としての地図に先行しているように見える。だが、本当にそのように言い切ることができるだろうか。

ソビエト連邦が崩壊する以前、ソ連共産党の指導者たちは、自らが統治する国家の巨大な広がり

の全体を、実際には地図の上でしか見ることはなかつたはずだ。なるほど彼らは、ボルヘスの小説の皇帝のように、国家の全領土を地図で覆うことはしなかつたが、彼らは地図を通じてしか国家の「全体」を知ることができなかったのである。彼らだけでなく、ソ連に住み、東欧に暮らしたすべての人びとが、彼らの属する「帝国」の全貌をじかに目にしたことはなかつた。彼らが実際に見ることができたのは、自らが生活する連邦やその同盟国家の一部であつたにすぎない。国境警備の兵士たちすら、たかだか国境線の一部を目にしただけである。連邦と同盟国の領域がどこまでであり、それらがどんな形をし、どこを境として他の国家と接するかということ、地図に描かれることによつてはじめて目に見える「事実」として確認されたのである。

人工衛星に搭乗した宇宙飛行士たちは、たしかに「母なるロシアの大地」を宇宙空間から一望しただろう。地上の人々もそこから送られてくる映像を見ることができたはずだ。だが、そこから送られてくる映像に国境は引かれておらず、自分たちの陣営の占める領域がどこまでであり、どこからが資本主義勢力の支配下にあるかは、手元の地図と引き合わせることによつてはじめて理解でき

るものであったのである。

ここでは地図は縮尺一分の一ではなく、それよりはるかに小さなものであるがゆえに、肉眼ではけっして見ることでできない「帝国」を一望の下に見ることを可能にしているのである。

やはり地図には描けても目には見えない「鉄のカーテン」が崩壊すると、国土の地形はそのままで地図上の国名や都市名が変わり、新たに国境線が引きなおされ、地図の色の塗り分けが変えらる。連邦の崩壊や国家体制の転換は、地図に描かれることによって、変革の現場に立ち会っていない数多くの人びとの間に「事実」として認められてゆく。ここでは地図は現実<sup>メディア</sup>に先立つわけではなく、その後を追って、つねに現実<sup>メディア</sup>に遅れて変化しているように見える。だが、たとえば国境線の変更に関して言えば、それはまず地図の上での変更が条約等で決定され、しかる後に「現実」として確定するのである。そして、人びとが「現実」を認識し、そのような「現実」を多くの人びとが受け入れるのもまた、地図という媒体を通じてなのだ。

引用先

2013

一橋大学―前期

若林幹夫『地図の想像力』

問  
い

傍線「オリジナル」としての世界は「コピー」としての地図に先行しているように見える。だが、本当にそのように言い切ることができるだろうか。」とあるが、作者は世界と地図との関係をどのように考えているのか、答えなさい（五〇字以内）。